第 40 回「正保城絵図」と新松江市指定文化財「松江城正保年間絵図」

（松江市松江城・史料調査課副主任/稲田信/2024 年２月６日記）

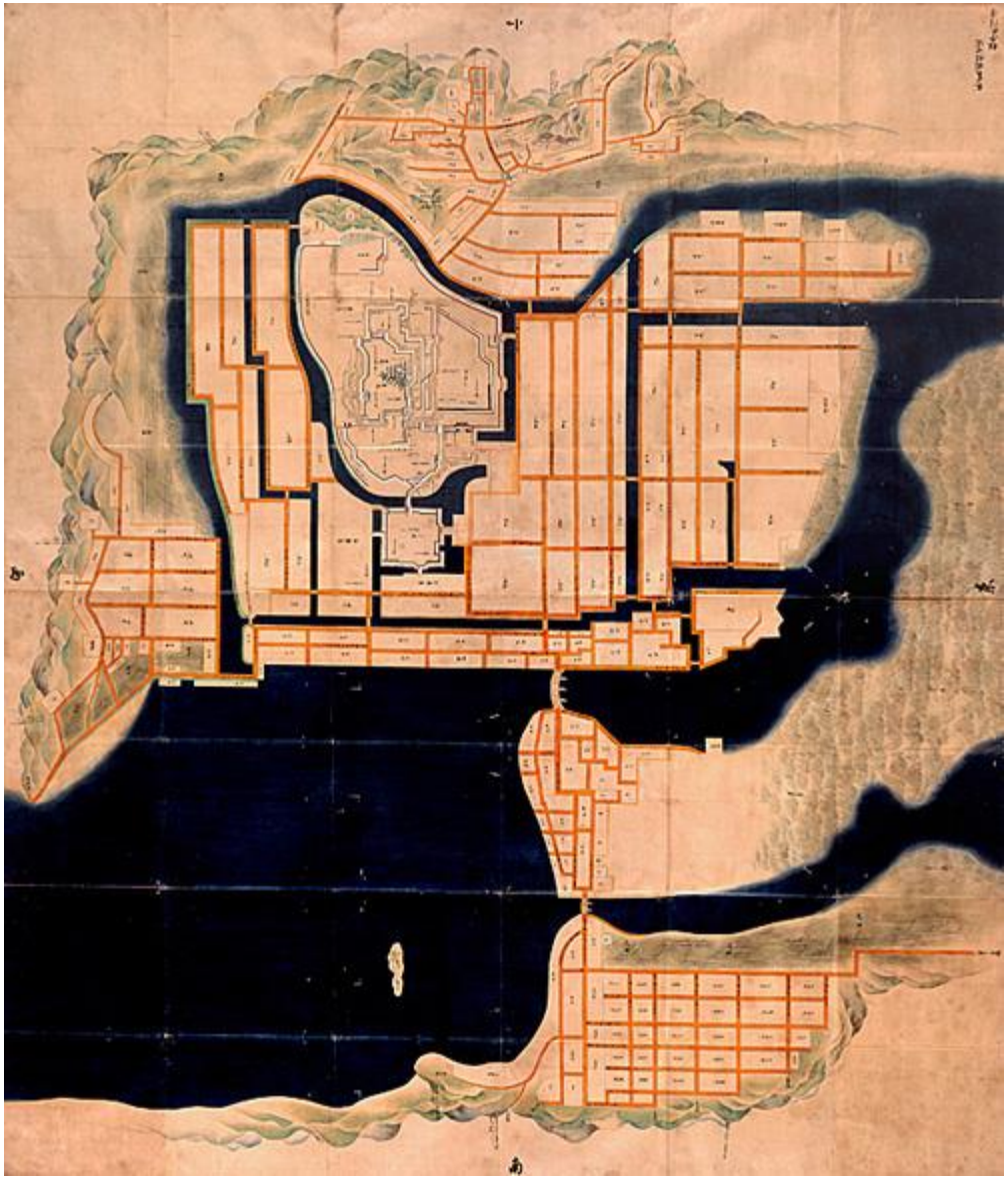
令和６年２月５日、松江市文化財保護審議会において、「正保城絵図」と密接な関連がある「松江城正保年間絵図」を松江市指定文化財に指定すべき旨、答申がありました。この機会ですので、「正保城絵図」と「松江城正保年間絵図」について、簡単に紹介してみましょう。

1.「正保城絵図」について

正保元年（1644）12 月、将軍徳川家光の命で、全国一斉の本格的な国絵図事業が開始されました。大目付井上筑後守政重の指揮のもと、国絵図、郷帳に加え、城絵図、道帳の提出（献上）が諸藩に求められます。諸大名にとって最高の軍事機密である城絵図の徴集は、幕府権力の強化につながり、作成にあたっては、描写（記述）すべき内容が細かく指示されました。

当時の幕府との力関係から、各藩は忠実に幕命を守って城絵図を作成・提出（献上）し、幕府の重要書類、書籍を保管する江戸城紅葉山の御文庫（紅葉山文庫）に収納されました。

いわゆる「正保城絵図」には、天守や櫓、堀、石垣、侍町、町屋、寺社などが描かれており、城郭内外の距離、堀の深さ広さ、石垣の高さ長さなどの情報は、特に詳細に注記されています。絵図は狩野派の絵師たちの手によって統一された画風で描かれ、図の全面に美しい極彩色を施し、絵図を描く巨大な用紙は光沢のある高級和紙（雁皮紙）を何枚も張り合わせ念入りに作り上げられました。



【図 1】「出雲国松江城絵図」（正保城絵図）重要文化財、国立公文書館蔵、274.0×324.0 センチメートル

幕府の創設後 40 年ばかり経って、各地の城下町もほぼ整備された時期に描かれた「正保城絵図」は、諸国諸城の軍事的機能の特性を幕府が完全掌握する目的に徴集された軍用図であり、城下町形成の初期段階の様子を知り得る貴重な史料です。また、幕府の権威が最も高まった時期に諸藩に作成させた絵図ですので、内容の信憑性は極めて高いものです。

紅葉山文庫の最後の蔵書目録である「元治増補御書籍目録」（国立公文書館蔵）によれば、幕末までに 131 枚が伝わっていましたが、紅葉山文庫の蔵書を引き継いだ国立公文書館（内閣文庫）には約半数の 63 枚しか現存していません。幸運なことですが、この国立公文書館の「正保城絵図」63 枚の中に、松江城とその城下を描いた「出雲国松江城絵図」【図 1】が含まれています。

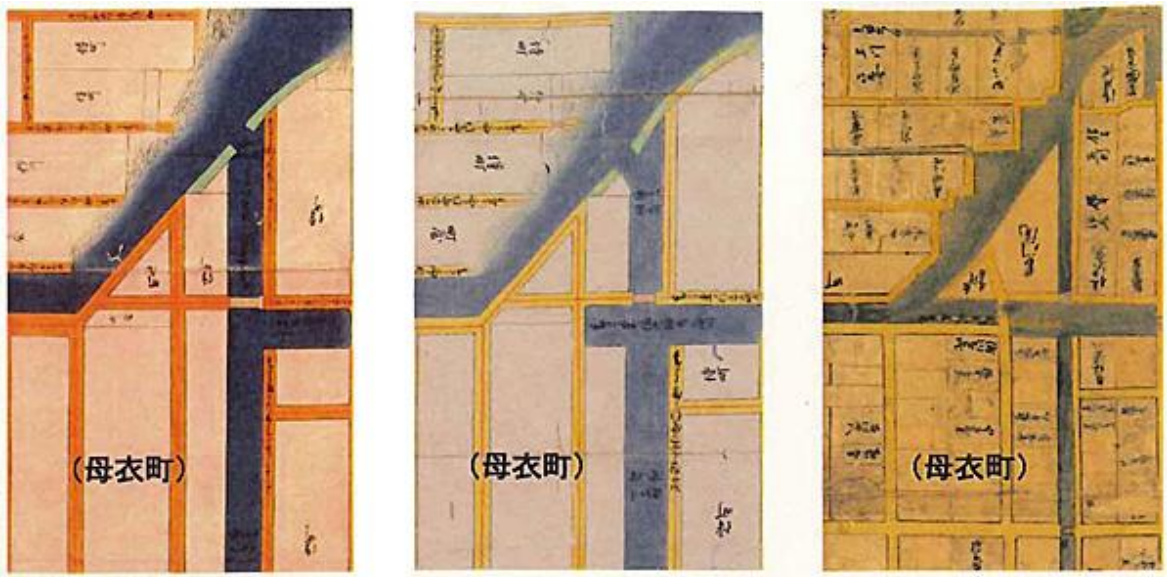
幕末まで紅葉山文庫に伝わっていた「正保城絵図」の約半数は幕末維新の動乱期に散逸したものと考えられており、戊辰戦争の折に紅葉山文庫から持ち出されたと考えられる絵図も存在します。また、国立公文書館に現存するもののほか、幕府へ提出した図の控図や写図が各地に残されている場合も少なくありません。

2.「正保城絵図」の控図、「松江城正保年間絵図」について

【図 2】「松江城正保年間絵図」乙部家蔵、288.0×326.5 センチメートル

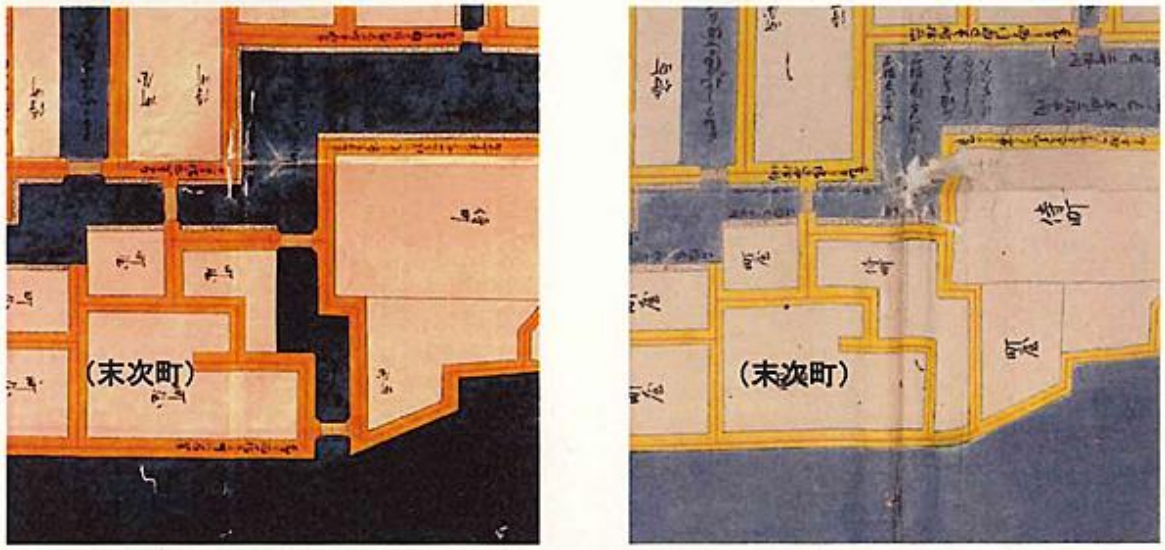
「正保城絵図」の一枚である「出雲国松江城絵図」（国立公文書館蔵）には、藩側の控図とされる「松江城正保年間絵図」【図 2】が存在します。この「松江城正保年間絵図」は、松江藩の家老職などを勤め、藩政に深く関わった乙部家により、大切に伝えられました。

藩側の控図ということであれば、提出図（献上図）である「出雲国松江城絵図（正保城絵図）」を本図とし、藩側の「松江城正保年間絵図」は忠実に描写したものと理解しがちですが、両図には次のような違いが確認できます（比較のため、「出雲国松江城絵図（正保城絵図）」は「公文書館図」、「松江城正保年間絵図」は「乙部家図」と略記する）。



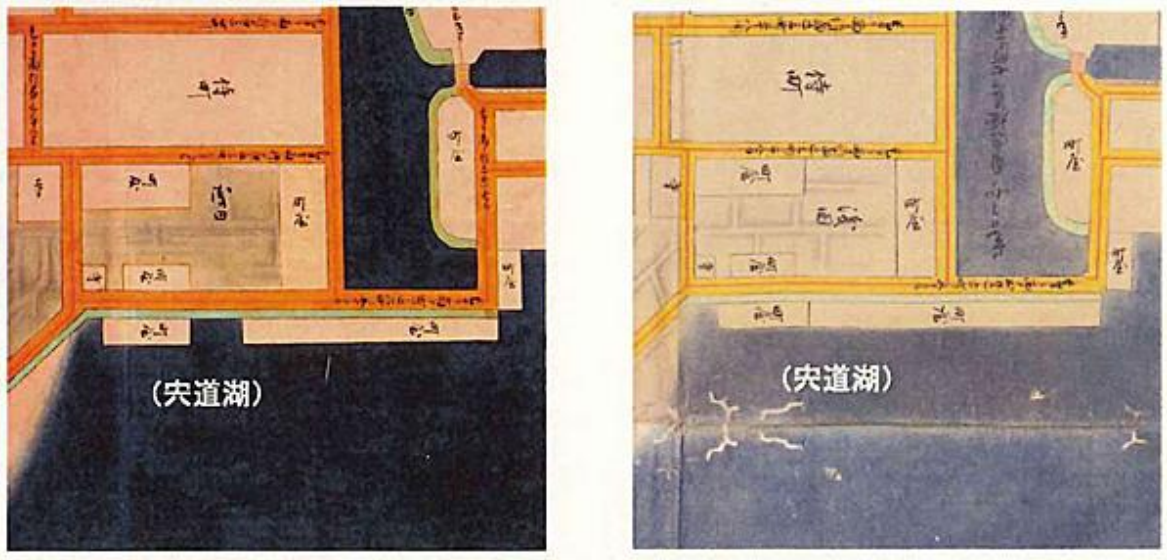
【図 3】母衣町北側の堀（左「公文書館図」、中「乙部家図」、右「松江城及城下古図」）天和 3～元禄 5 年（1683～1692）

比較 1：母衣町北端の三角地の南側を見ると、「乙部家図」には、東側に「堀」が入り込んでいる。（17 世紀末以降の城下絵図では「堀」が東西に貫通し、その途中である「乙部家図」は新しい情報で描かれている）【図 3】



【図 4】末次町東側の堀（左「公文書館図」、右「乙部家図」）

比較 2：末次町東側を見ると、「公文書館図」には「侍町」の西に「堀」が描かれている。一方、「乙部家図」では「堀」は埋まり、「町家」になっている。【図 4】



【図 5】宍道湖沿いの町屋（左「公文書館図」、右「乙部家図」）

比較３：外中原の宍道湖沿いをみると、道に沿う細長い区画には「町家」があるが、「公文書館図」では区画が二分され、その間が湖面となっており、「乙部家図」は、街区は一続きである（後の城下絵図では街区は一続きで、「乙部家図」は新しい情報で描かれている）。【図５】

比較４：記載されている注記をよく見ると、「公文書館図」に記されている注記が、「乙部家図」では記されていない箇所がいくつかある。

比較５：「公文書館図」では、城郭に至る本道は太く脇道は細く朱線が引かれるが、「乙部家図」では太・細の区別はあまり見受けられない。

比較６：「公文書館図」には本丸に設けられている「一ノ門」正面（「二ノ門」横）にも「門」が描かれているが、「乙部家図」にはない（「公文書館図」に描かれた「一ノ門」正面の「門」は実際には考えにくく、「乙部家図」が実態に合わせて描かれている）。

全体的に見て、「公文書館図」の方が「乙部家図」より丁寧に描かれており、記載されている字句も多いのは、「公文書館図」が幕府に提出するために調製され、清書された図面であるからでしょう。一方、「乙部家図」は新しい情報、実態に合わせた情報で描かれており、２枚の図の違いは作成年代の違いを反映したものと思われます。

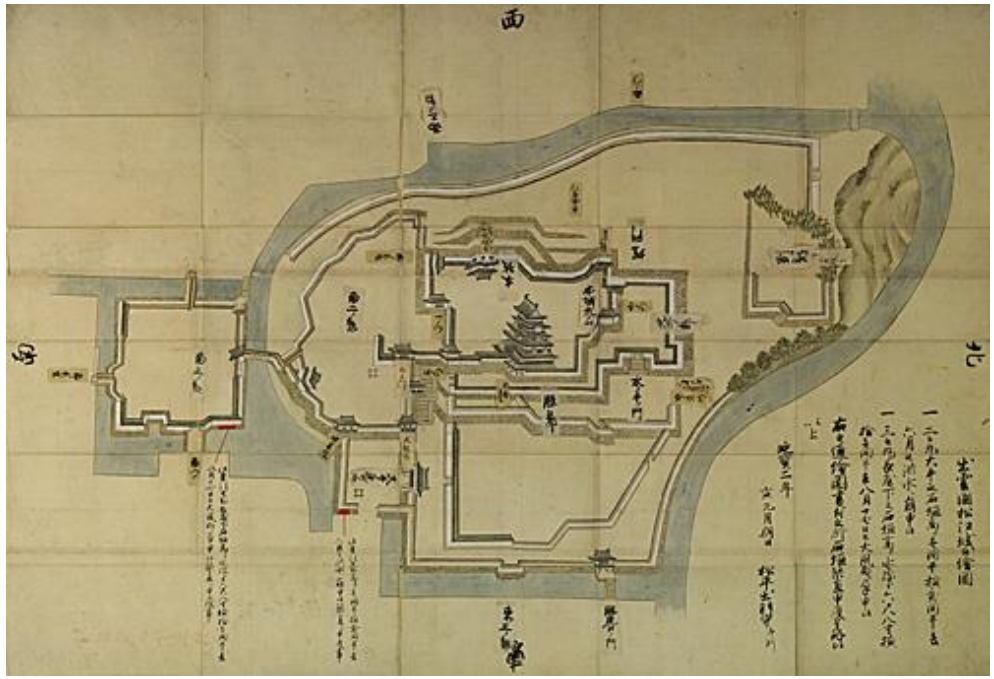
なぜ、このような違いが生じたのでしょうか。今後、解明していきたい、「松江城の謎」の一つです（正保の国絵図等は、江戸城内の紅葉山文庫への収納間もない明暦３年〔1657〕の江戸城大火で焼失し、幕府は寛文５年〔1665〕に諸藩に国絵図控を写させ再提出を命じています。「正保城絵図」が明暦大火により焼失した可能性は低いようですが、明暦３年大火による国絵図再提出の動きが、作成年代の違いに反映しているのかもしれません）。

いずれにせよ、「正保城絵図」である「出雲国松江城絵図」（国立公文書館蔵）とともに、「正保城絵図」と関連の深い「松江城正保年間絵図」（乙部家蔵）が伝存していたことは、松江城研究を進めるうえで幸運なことです。

3.「正保城絵図」の影響を受けた多様な城絵図

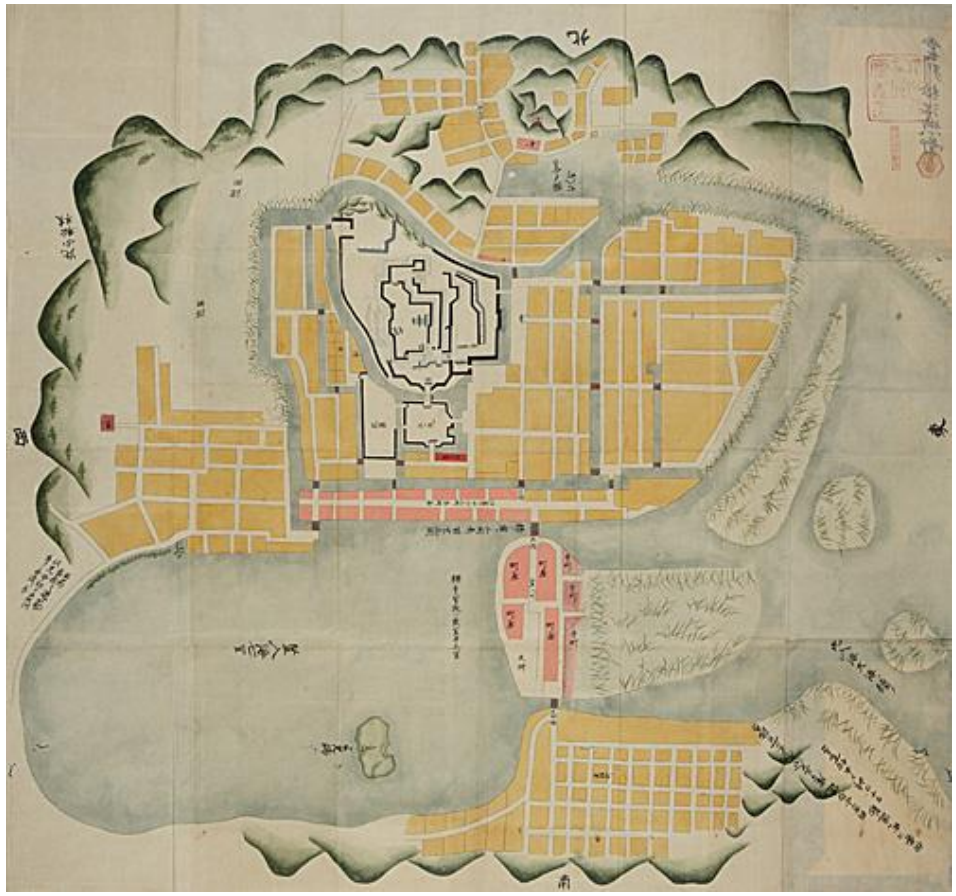
全国の城郭とその城下を統一的な様式で書いた幕府収納の城絵図は、「正保城絵図」のみですが、諸国では多様な城絵図、城下絵図が作成されました。

「出雲国松江城之絵図」（松江歴史館蔵）【図６】は、延宝２年（1674）９月に松江藩から幕府に提出した城郭（石垣）修補願図の控図とみられます。本丸・二之丸・三之丸を描き、石垣の破損状態を記しています。この図での城郭部の描き方は、「出雲国松江城絵図（正保城絵図）」（国立公文書館蔵、図１）に類似しており、藩側の「正保城絵図」（控図）を写し、城郭修補願絵図として使用していたことが分かります。



【図 6】「出雲国松江城之絵図」松江歴史館蔵、84.4×124.0 センチメートル

また、城郭を中心とした諸国の「城絵図」には、諸大名家や軍学者らにより作成されたものがあります。松江城と城下を描いたものとして、大名家に伝来した「雲州松江（乗命）」（国立公文書館蔵〔美濃国岩村藩伝来〕）【図 7】、「諸国当城之図松江」（広島市立図書館〔浅野文庫〕）などがあります。不思議なことに、「雲州松江（乗命）」、「諸国当城之図松江」とも、提出図（献上図）である「出雲国松江城絵図（正保城絵図）」ではなく、「松江城正保年間絵図」（乙部家蔵）を基にして作図された形跡が認められるのです（前述の比較 1、2、3 など）。諸国城絵図の作成過程を考えるうえでも興味深い事例です。



【図 7】「雲州松江（乗命）」国立公文書館蔵（岩村藩伝来）、
95.0×100.0 センチメートル

なお、旧松江藩士家に伝来した「極秘諸国城図」（松江歴史館蔵）は、各地の城郭や城下を描く全 74 枚の絵図群で、作図の基となった絵図に、「正保城絵図」が含まれていることが描写の特徴から認められます。

「正保城絵図」は、紅葉山文庫に収納された幕府と諸大名の最高機密（江戸幕府の絵図）のはずですが、忠実な写しではないにせよ、その情報は密かに出回っていたのですね。

（掲載絵図は、『松江市史』別編 1「松江城」より転載）